

目次

I 建物を読む

館・屋敷をどう読むか——戦国期大名館を素材に——	小野正敏	5
発掘された建物遺構をどのように読み解くか	富島義幸	49
——中世住宅発掘遺構の研究方法をめぐって——		
つわものの館の成立と姿	八重樫忠郎	81

II 出土文字資料の見方

出土文字史料の見方	五味文彦	101
経塚出土文字資料と考古学的視点	村木二郎	123
——同一人物が関与した経塚から——		

鴨田遺跡出土の巡礼札が語るもの……………高橋慎一朗 145

III 場を解く

城と聖地——近年の「城とは何か」論にふれて……………中澤克昭 159

ムラが消えた——ムラ研究の可能性……………飯村均 189

金山遺跡における「場」と「景観」……………萩原三雄 207

「考古学と中世史研究」シンポジウムの

一応の区切りにあたって……………萩原三雄 223

館・屋敷をどう読むか

——戦国期大名館を素材に——

小野正敏

はじめに

発掘された考古情報としての館・屋敷は、諸施設と空間、モノの統合体として把握される。空間と施設には、建物をはじめ、堀、土塁、柵、溝、通路、広場、庭園などの遺構があり、館・屋敷は、それらの有機的な関係で機能していた。建物や庭園は顕著な遺構ではあるが、その構成要素のひとつである。主殿や会所といった中心建物だけを取り上げた、あるいは庭園だけの議論は、考古学には似合わない。また、考古情報の特性である出土モノ資料から語られることも多い。建物やモノだけが遊離されることなく、館・屋敷という統合された場で議論することが有効である。与えられた報告題「建物を読む」から「館・屋敷を読む」に変えた理由もこの点を意識したことによる。

一方、遺跡がもつ廢墟としての宿命から、発掘によって本来の館・屋敷の全体像がすべて把握できることはなく、直接的なあるいは狭義の考古学の方法と発掘された遺構・遺物のみからの分析には超えられない限界が伴う。特に建物は、地上部分を残すことはなく、偶然発掘される建築部材はきわめて限られたもので、その意匠や建築構造を考古資料のみから説明するのは困難である。さらに残された礎石や柱穴から復元される平面的な間取りさえも、それを確定するには建築資料や絵画資料等の研究成果が必要不可欠となる。

発掘されたモノ資料は、館・屋敷の空間や建物の機能、住人を具体的に語るもうひとつの考古資料である。だがいうまでもなく、この場合もそうしたモノ資料がどういう場面でどのように使用されるかという、文字史料や絵画資料などによるモノの用途と場の関連づけが前提となる。しかし、考古遺物としてのモノと文字史料や絵画資料、伝世品などの実物資料で確認できるモノとの間には、まだまだ大きな乖離がある状況といわざるをえない。今後、こうした分野の協業をいつそう進めることが求められている。

文字史料の分野では、古代から公家や寺家においては、日記をはじめ儀礼や行事に関する多様な記録が残されてきた。こうした記録には、前例を重視する社会の中で、場の使い方や参加者の身分、役割、席次、進行、室礼などを詳細に記録したものがあり、なかには会場となつた建物の指図を伴う例もある。しかし、新興権力である武家に関しては儀礼や行事の整備、確立は遅れ、記録が残されるようになるのは、武家政権が制度を整えてくる十三世紀以降である。また、そうした多くの儀礼、行事をはじめ、その舞台装置である屋敷、建物も公家や寺家社会からの借り物から始まっており、武家社会がそれらをどのように導入し、自らの価値観によって、どう変えていったのかは重要な課題といえよう。

ここでは、「館・屋敷をどう読むか」について、武家の住空間の復元としてではなく、研究会における報告の視点に基づき、武家館を権力表徴と位置づけて、戦国期においても各々の武家権力が、自らの論理に合わせて既成の権威から、何を取捨選択し、どのようにアレンジしたのかを意識しながらまとめたい。

筆者は、これまでもこのテーマについて、(1)武家の権力編成の原理である主従関係が館や建物空間などの場の設定や道具の使い方の基底にあること、(2)中世に特徴的なふたつの空間原理(表は主従制・イエの原理、奥は一揆の原理)の並立が都市空間のみならず、権力表徴としての館、建物空間にもあり、それが織豊期にその一方が吸収、統合されて近世の屋敷空間へ変化すること、(3)日本列島のなかで、各地の武家権力がもつ個性や地域性が館・屋敷の景観、モ